

本実践・研究から見えてくること

研究協力者 成田 龍一郎

(秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座)

役割演技と「没入」について

本時では、役割演技を中心とした授業が行われた。附属小学校では継続的に役割演技を取り入れているため、本稿ではこの役割演技に焦点を当てて考察したい。役割演技は二つの場面で導入された。一つ目は物語の終盤の場面、二つ目はその後の「ふみおはどうすればよいのか」を検討する場面である。

役割演技が有効に機能する場面はいくつか考えられるが、とりわけ葛藤やジレンマが内在する場面が挙げられる。実際の授業においては、その葛藤やジレンマを役割演技を行う児童自身がどの程度自覚できているかが、最も重要となる。

この観点から見ると、一つ目の場面は、役割演技を通して葛藤やジレンマを可視化できた点で十分な意義を有していた。他方、二つ目の場面では、葛藤やジレンマが十分に自覚されないまま役割演技が進行してしまっていた。授業者は登場人物三人を指名し、仲直りの場面を演じさせたが、ここでは本来、二つの葛藤に焦点を当てることができた。すなわち、第一に、ふみおが仲直りを持ちかけるかどうかという葛藤、第二に、仲直りを持ちかけられたひろみとのりこがそれを受け入れるかどうかという葛藤である。しかし二つ目の場面では、これらの葛藤が明確に扱われないまま、「仲直りをする」という既定路線であるかのような雰囲気の中で進められた。

なぜこのようなことが生じたのだろうか。筆者の見立てでは、主因は、授業者が意図した活動を授業内に過度に詰め込んだ点にある。このことは、道徳科の授業構成を考える上でも重要な示唆を与える。道徳科は、教師が熱心であればあるほど取り扱いたい内容が増えやすい教科である。それは、道徳科の自由度の高さに由来する必然的な傾向と言える。他方で、多くの活動を同時に取り入れようとした授業は、授業者が熱心であるほど消化不良に陥りやすい。

なぜか。ここで「よい学級」を論じる余裕はないが、少なくとも「子どもがありのままでいられる場」であるという点は理解されやすい。子どもがありのままでいられる場では、その志向性は無限定的といえるほど拡散する。その前提に立てば、「よい授業」の一つのバリエーションとして、この拡散する志向性・エネルギーを抑制せず、子どもが特定の対象へと没入していくことを可能にする授業が挙げられよう。しかし、それを実現することは容易ではない。

本学級では、子どもたちの表情が生き生きとしており、志向性が拡散的になる場面も多かった。道徳科で重要かつ難しい「よい学級」が形成されていたと評価できる。授業者は、普段の授業で挨拶をあえて取り入れないなど、授業場面でも拡散性を維持する工夫をしていた。そのような中で「よい授業」を成立させるためには、一度に多くのことは扱えないのは自明である。没入を生み出すには時間が必要であり、多数の活動をこなそうとすると規律が求められるが、それは「よい授業」と相容れない。

紙幅の制約から詳述できないが、本時では、教室環境の工夫や教科書提示の工夫など、児童の没入を促す仕掛けが適切に施されていた。実際、一つ目の役割演技では、児童が没入し始めていた。しかし二つ目の場面が追加されたことで、十分に深まる前に次の活動へ移ってしまった印象が残った。

繰り返しになるが、「よい学級」をつくること自体が容易ではない。その土台が形成されていた本学級において、授業者と児童が足並みを揃えることができれば、道徳科として意義のある実践となるように思われる。